

日新齋から禁制の動き

藩政時代、薩摩藩では一向宗（浄土真宗）に対して厳しい禁制を敷いていた。なぜそのような事態になったのか。

まず一向宗はいつ頃から南九州に波及したのだろうか。

浄土真宗が九州へ布教を始めたのは、蓮如の弟子・天然浄祐（1442～1506年）からだという。15世紀末、浄祐は出身地の周防潮ら長門、豊前、豊後への布教を拡大した。

その影響もあるのだろうか、同宗が南九州にも伝播した時期は16世紀初めだという。永正3（1506）年が薩摩国千野湊の釈明心という門徒に与えた文書と本尊（方便法身尊形）の御絵像が現存している（「本願寺鹿児島開教百年史」）。

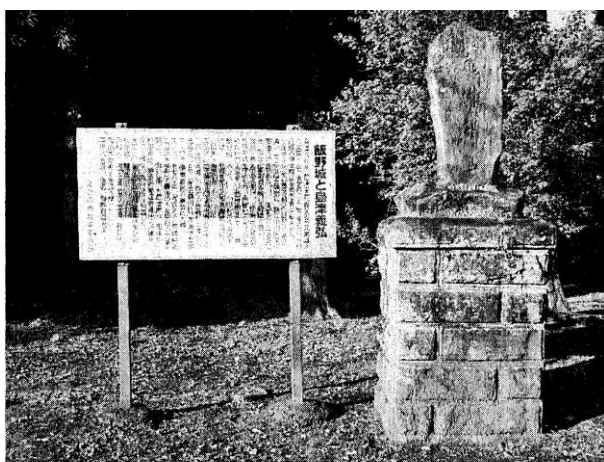
ただ、「薩摩国千野湊」は現在の串間市千野とされるが、この地は日向国である。そのため、薩摩周日置郡帆ノ湊ではないかという説もある（芳即正「権力に抗った薩摩人」）。

島津氏による一向宗禁制の最初の事例が一次史料で確認できるのは、天正13（1585）年9月15日、肥後在陣中の島津義弘が触れたものである（「上井覚兼日記」同日条）。

「当所（肥後国）は皆々一向宗だと聞こえている。然れば、この以前からの事なので、無届けでご成敗するのはいかがか。まず改宗するよう厳しく告げて、その後も一向宗でいる者は処刑してもよいと仰せになった」

義弘は肥後国の一向宗門徒への改宗を迫っているが、突然肥後国に布告したとは考えにくい。島津氏領国での方針の延長上にあるのではないだろうか。

永禄5（1562）年、日向真幸院を領する北原氏の当主兼隆が死去すると、家中は一向宗門徒でほとんど占められ、非門徒は追放されたという（「箕輪伊賀自記」「長谷場越前自記」）。



一向宗門徒が多数いた北原氏の居城・飯野城本丸跡
＝えびの市

その後、義弘が真幸院に入部するが、その支配は一向宗門徒への抑圧を伴ったと思われる。

島津氏で一向宗禁制を最初に主張したのは日新齋（忠良）だといわれる。その伝記「日新菩薩記」に、キリシタンや法華宗のほか、一向宗を忌避する一節がある。

「魔の所為か、天眼拝み（キリシタン）、法華宗、一向宗に数寄の小座敷（茶の湯）」

このうち、キリシタンはイエズス会宣教師が一時布教を認められており、法華宗に至っては禁制になったとは思われない。だから、一向宗だけがもっとも厳しい扱いを受けたといえる。

「日新菩薩記」は日新寺（現・竹田神社）の第八世・泰円守見が慶長2（1597）年に著したといわれる。

奇しくも同年2月、朝鮮出陣中の義弘が掟書を定めている。29カ条に及ぶ詳細なものだが、その最後の条に「一向宗の事、先祖以来御禁制の儀に候之条、彼の宗躰になり候者は、曲事たるべき事」とある（「島津家文書之三」1496号）。

義弘は「先祖以来御禁制」を大義名分として、一向宗の門徒を許さない態度を示している。「先祖」がだれかといえば、祖父の日新齋を指すという。しかし、日新齋の段階では全面的な禁制はとられておらず、まだ心持ちの問題だった。

島津氏が一向宗に厳しい態度をとるようになるのは、やはり政治的な要因があり、豊臣政権との対決にかかわることではないだろうか。

（歴史作家）

一向宗と島津氏（下）

禁制から「かくれ念仏」へ

島津氏領内で一向宗禁制が始まったのはいつからで、どのような理由によるものかを確定するのは難しい。

島津氏が一向宗に脅威を覚えたとすれば、その宗旨に基づく団結力が一揆などの軍事力に転化することではなかったか。

たとえば、文禄3（1594）年6月、日向佐土原領で、当主・島津豊久が折から朝鮮出兵中、大光寺門前で男女（人数不明）が起請文を呈し、永代に一向宗にならないことを誓っている（「大光寺文書」94）。これなどは氷山の一角で、相当数の門徒衆が潜在していたと思われる。

また慶長5（1600）年2月、庄内の乱で、島津忠恒（のち家久）が伊集院忠真方の山田城（都城市山田町）を攻めたとき、近くの稲荷社を忠恒勢が破壊してしまったらしい。父義弘は「稲荷社は当家にとって大事な信仰の対象なのに言葉もない。さらに忠恒勢のなかに一向宗の門徒衆が含まれており、彼らが稲荷社を破壊したのではないか。事実とすれば、けしからぬことだ」と怒っている（「旧記雑録後編三」1031号）。

このように、島津勢のなかに一向宗門徒が紛れ込み、しかも、重大な破壊活動をしたことを義弘が問題視しているのである。

結局、島津氏が一向宗禁制を本格化したのは徳川幕府がキリシタンに対する禁教令を発したのと深く結びついていたという。寛永12（1635）年、薩摩藩ではキリシタン取り締まりとともに、独自に宗門手札改めにより一向宗門徒を取り締まっている（桃園恵真「真宗禁制と伊集院幸侃」「島津家歴代制度」巻六十一）。

このように、薩摩藩領において全面的な禁制が敷かれたものの、門徒衆の信仰はひそかに幕末までつづいた。いわゆる「かくれ念仏」である。門徒衆は村などを単位として、「講」を組織

し、講頭をリーダーに肝煎、世話人、組頭から一般門徒まで縦の組織系統ができていたという。門徒は武士、百姓、町人を問わず各層で構成されていた（芳郎正「かくれ念仏と講組織」）。彼らはひそかに山中の洞窟や掘り抜いた洞穴（ガマ）で「南無阿弥陀仏」を唱えつづけたのである。

また、京都の本願寺（とくに西本願寺）とつながり、本願寺から阿弥陀如の本草、親鸞や蓮如を描いた御絵像、南無阿弥陀仏の文字を書いた御名号などを下付されると、冥加金を上納するという関係もあった。

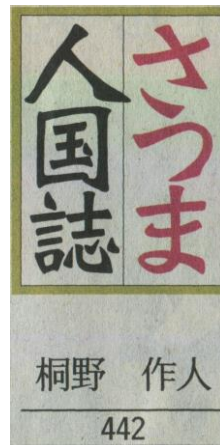
藩政時代を通じて、藩当局はたびたび手札改めを実施して多数の門徒衆を摘発し、弾圧を加え改宗を迫ったが、それでも信仰は脈々と生きつづけた。

薩摩国でも門徒衆が多かった出水郡を例にとると、宝暦4（1754）年に手札改めをしたところ、じつに1,700人以上の門徒が自首して転宗を誓ったが、多くは偽装だったという。

また出水の門徒衆はひそかに国境を越えて一向宗に寛容な肥後水俣に行き、真宗寺院の西念寺や源光寺に抜け参りをしたことも知られる。郷の三役たちは抜け参りする門徒を監視、摘発するために隠横目を派遣した。彼らの報告によると、それらの寺には出水の門徒衆のために「薩摩部屋」が設けられており、そこで僧侶の説教を聴き、祈りを捧げたという。（「税所文書」「出水郷土誌」）。

禁制から300年近くたち、ようやく信仰の自由が認められたのは明治9（1876）年のことだった。そして次々と真宗寺院が建立されていくのである。

（歴史作家）



花尾のかくれ念仏洞

鹿兒島市花尾町

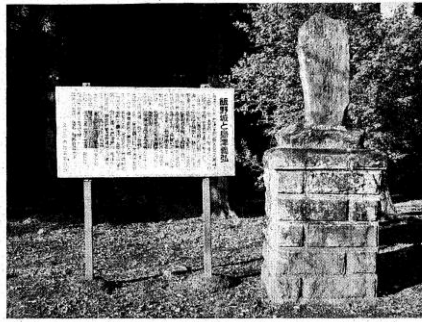


一向宗と島津氏 (上)

藩政時代、薩摩藩では一向宗(浄土真宗)に対して厳しい禁制を敷いていた。なぜそのような事態になったのか。まず一向宗はいつ頃から九州に波及したのだろうか。浄土真宗が九州へ布教を始めたのは、蓮如の弟子・天然浄祐(一四四一〜一五〇六年)か

日新斎から禁制の動き

らだという。十五世紀末、浄祐は出身地の周防から長門、豊前、豊後への布教を拡大した。その影響もあるのだろうか、同宗が南九州にも伝播した時期は十六世紀初めだという。永正三(一五〇六)年、本願寺第九世・実如(一四五八〜一五五



一向宗門徒が多数いた北原氏の居城・飯野城本丸跡 三えびの市

義弘は肥後国の一向宗門徒への改宗を迫っているが、突然肥後国に布告したとは考えにく

見が慶長二(一五九七)年に著したといわれる。奇しくも同年一月、朝鮮出兵中の義弘が捷書を定めている。二十一条に及ぶ詳細なものが、その最後の条に「一向宗の事、先祖以来御禁制の儀に候之条、彼の宗牒になり候者は、曲事たるべき事」とある(「島津家文書之三」一四九六号)。

一向宗と島津氏 (下)

禁制から「かくれ念仏」へ

島津氏領内で一向宗禁制が始まったのはいつからで、どのような理由によるものかを確定するのは難しい。島津氏が一向宗に脅威を覚えたとすれば、その宗旨に基づく団結力が一揆などの軍事力に転化するのではなかったか。たとえば、文禄三(一五九四)年六月、日向佐十原領で、当主・島津豊久が折から朝鮮出兵

中、大光寺門前(男女(人数不明)が起請文を呈し、永代に一向宗にならないことを誓っている(「大光寺文書」九四)。これは水山の一角で、相当数の門徒衆が潜在していたと思われ。

「南無阿弥念仏」を唱えつつ破壊してしまつたらしい。父義弘は「稲荷社は当家にとつて大事な信仰の対象なのに言葉もな



花尾のかくれ念仏洞

鹿兒島市花尾町

このように、薩摩藩領において全面的な禁制が敷かれたものの、門徒衆の信仰はひそかに幕末までつづいた。いわゆる「かくれ念仏」である。門徒衆は村などを単位として、「講」を組織し、講頭をリーダーに肝煎、世話人、組頭から一般門徒まで縦の組織系統ができていたという。門徒は武士、百姓、町人を問わず各層で構成されていた(芳即正「かくれ念仏と講組織」)。彼らはひそかに山中の洞窟や掘り抜いた洞穴(分)で

(歴史作家)